

2000. 2. 15

手〜 グリーク「2つのメロディ」より『はじめての出会い』

手にしゃべらせることがある。

気持ちだけが先走りしたり、どう表現してよいかわからなくなってしまうときは、手に語ってもらうことがある。

つなぎ合わされた手、髪や頬を撫でる手、抱き寄せる手、差し出す手、差し出された手…。

先日などは駅で、コートのポケットに、つなぎ合わされた手もぐりこんでいるのを見た。とても寒い日のことだった。

腕を組むより、僕は手をつなぐほうが好きだ。

気持ちが、近づこう近づこうとしている二人の手が合わさると、それまでの緊張が、ふっ、と消えてしまうこともある。手が合わさった瞬間に、すうっと何かが流れ込み、そして流れ出して行く。音楽に身を任せたときのような、吸い寄せられるような感覚…。

また、手が合わさって、親しみが瞬間的に増すと、人は普段着になってしまうものだ。ほっとすると同時に、安心感が広がり、飾りが消えてしまうのだ。

日本には、あまり握手をするという習慣がない。お辞儀をしたり、うなずいたりする方が多い（その場合には、目や顔の表情が語りの役を務めることが多い）。

しかし、握手をするという行為には、人々を瞬間的に近づける計り知れない力があるような気がする。一般的に握手がなされていない日本では、なおさら、その行為は新鮮だ。初めて会った人には、進んで握手を求めてみよう。

この曲は北国の牧歌的な世界を、民族的な響きで伝えているという。が、僕には、手をつないだときに、相手の心が流れ込んでくる、その時の、かすかな切なさ、世界がぐいぐい大きくなって行くような感覚に似ているような気がするのだ。